【平成22年度例会企画より】

講演「私と文法論」

青木勝彦

はじめに

どうも過分なご紹介を頂きまして恐縮しております。退職記念講演ということで、今日を迎えたわけですが、こういう日がくる、ということが私には想像できないような身体の状態が続いておりまして、まぁ、よく今日まで保ったなぁ、というのが本当のところです。

つい一昨日も、今年初めてカタバミが咲いてですね。オオイヌノフグリが咲いていましたもので、ああいうのが咲いたよね、と学生たちにいいました。で、「この年になってくるともう一回見られるかどうかなぁ、というところが怪しいんだよねぇ。」っていったら、その学生たちはみんな「そうですよねぇ」って。（一同笑）国語国文学科のはずなんだけど、まぁなんとデリカシーのない…。そういう中にいたんだなぁーということを改めてこう、感じさせられました。

文法論へ

今日は、「私と文法論」ということで私が考えているような文法論ってどんなもんか、ということを中心にお話ししようと思います。

で、そもそも文法の方に私が入っていったのは、大学に入ってというんですかね。大学に入る時は語学の分野がある、なんてこともほとんど頭になくて、文学をやるつもりでいたわけです。で、文学をやるつもりでいたんですが、どうもその、「私に文学向いてないなぁ」という風にちょっと感じることがありまして、それはいろいろ調べて事実に基づいて何かをいおうとすると、そこまではいえるわけですよね。でも文学をやるからにはそこからあと何か一ついいたいわけです。それがないと何か文学をやるといってもあんまり面白くないよね、ということと、なおかつ、それ以上の一言でみんなが納得してくれるようなことをいつでもいえるか、というとどうもそれはいえそうに

ないなぁということで、語学の方にいこうか、ということで文法の方を。

文法論の単位への関心

転向した初めは文法そのものをやる気はなかったですが、結局文法の方に変わっていきました。初めは助詞だとか接尾辞だとかそういうものを一つ一つ潰していこう、という風に思っていたわけです。そういうことを始めて、大学院の時ですね、「どうせやるなら接尾辞全部やっちゃえー」というわけで、平安時代の資料を相手に接尾辞を全部集め始めたわけです。で、「接尾辞を全部集めようとすると、何が分からなければいけないか」というと、「接尾辞は何だ」ということが分からないといけないわけです。で、「接尾辞が何だが分からなければ、何を集めているか分からない」ということになるわけです。要するに何を集めて良いかも分からないし、自分が集めているものが何なのかもわからないといったらいいのでしょうか。で、そうすると自分がやっているのは一体何だろう。

語というもの

そういうところから、文法論の単位をあれこれと考えるようになって、当時、私はどんな風に考えていたかというと、自然科学は自分の身の回りのものを分析していって、いろんなものに出くわしますよね。で、いろんな単位があります。何か物質があればその物質を構成しているその分子みたいなものがあり、それから更に原子があったり、もっと小さな単位が出てきたりしますよね。それは調べていけば出てくるものです。

言語を研究する場合でも、言語を相手に、自然科学が自然を相手にするが如くやっていけば、言語の単位というものは自ずと分かってくるだろうという風に考えて、一生懸命探していたわけです。当時、いろんな人の文法論を読んで、読んではみるのですけれど、結局納得できない。文の定義が二百越えるくらい、当時であったと思うのですが、結局納得できるようなものはない。いろいろ悩んでいて、その悩んでいたときに、自分の中では大きな転換だと思うのですが、そういうことが起きました。それはどういうことか、というと、一生懸命、原子論的に言語を観察して単位を探す、というようなことをやって、一体何を明らかにしたいのだというわけです。文法をやって、明らかにしたいのは何かというと、いろんな意味を持った要素がいくつか集まって、全体としてある何かまとまった意味を作り出しますね、それならば、そういうことが説明できるようなものを設定して、それを単位にしてしまえばいいじゃないか、というわけです。

その変化は、見方がガラリと変わっている、ということはお分かりいただけるでしょうか。私の中では、文法の単位は探すものであったわけです。で、探すものであったのだけれども、それが、何でこんな風になったのか、どういう関係があるのか分からないのですが……、ポアンカレという数学者がいますよね。ポアンカレのものを読んでいるときに、何か頭にふっと閃いて、文法論の単位というのは、要するに何を明らかにしたいかという目標があって、その目標に迫れるようなものを単

位にすればいいじゃないか。そういう風に私の中で大きく変化があった。その時の感じは、分かるというのはこういうことかなぁ、という様な感じでした。

あなた方がそういう経験をされたことがあるかどうか分からないのだけれど、何かある事柄についてずっと考えて悩んでいる時に、別にそんなこと念頭に全然ないのだけれども何かの拍子にポンと出てくる。そういう感覚があって、分かるというのはこういうことなんだと言ったらいいのでしょうか。今までこう、ゴチャゴチャとしていたものが全て所を得て、頭の中に整理された形でいきなり浮かんでくるみたいな、そういう感覚です。

文法論の単位として語というものをどういう風に設定したらいいか、ということでその時に考えたのは……ちょっと黒板を使わせていただきますが……（板書縦一行に「A　B　C」）…AとBとCと三つの単位があったとしますが、Bが一つの語であるかどうか、ということを決定したい時に、Bというものはいつでも全体としてAと関係するだとか、あるいは全体としてCと関係するとか、そういうような単位であって、Bの一部だけがAと関係するだとか、あるいはCと関係するだとか、そういうことではないような単位であると。文という単位が適切に設定されていれば、あとはこういう風にして、語という単位を認定できるはずだ。実際に、じゃあこういう方法で語というものを認定すると、例えばどういうことになるでしょうか、ということで、実際適用してみたのが、日本語の形容詞文についてです。

形容詞文について

日本語の形容詞文だと、形容詞文というのは日本語では形容詞が述語そのものになりますよ、という風に説明されます。形容詞文というのはどう考えても「述べ立ての文」です。喚体の文、山田孝雄さんの喚体の文ではなくて、述体の文の、物事が、何がどうであるかということを表現する方の文になります。これは動詞がありません。動詞がないのになんで述語になれるのだ、というわけです。そこのところの説明をするのに、「日本語では確かにそうなっているから、そうなのだ」というのが普通の考え方と思います。日本語では「空が青い」は、そのまま文として成り立っている。それを見る限りにおいては、「空が青い」は、日本語では、当たり前の文として成り立っているのだから、形容詞文は日本語ではちゃんと述語になれるのだ、というわけです。ただ、他の言語ではそうはいかないわけです。他の言語ではそうはいかないのに、「なぜ日本語ではそうはいっているのだ」というわけです。

そうすると……「空が青い」を例にとりますと、これは例えば過去形にしたいという時には「空が青かった」になります。未来推量にしたければ「青かろう」だとかもっと別の形も出てきます。それから「空がとても青い」というような比較の表現を受けて「青い」と「とても」は結びついてまとまったイメージを作ることができますよね。でも、例えば「とてもある」だとか、あるいは「とても机だ」という表現はありえないからないわけです。

ありえないのは、別に日本語だからありえないのではなくて、およそヒトの頭の中で「とても」みたいな程度と「机」だとか「人」だとか、という概念は結びつけることができないからできないわけです。文法というのはそういうところから生まれているらしい。「空が青かった」だとか「空がとても青かった」みたいな表現がなぜ構成されるのか。過去形にするときには、ここに「あり」のラ変が介在して現れてくるわけです。そうすると「空がとても青かった」という時のこの「青かった」というのが先ほどのＡＢＣでＢの部分が「青」いわゆる形容詞だとすると、「とても」は「青かった」のどこかに掛かって、ここの「あり」の部分は、「とても」と直接結びつくことのできない表現ですね。「とても青い」はいえても、「とてもある」はいえないわけで、日本語では結びついて一つになってしまうと末尾の方の要素の性質になるわけです。

そうすると「とても青かった」という時の「とても」は、この全体に掛かっているとはとても考えられない。

そうすると、先ほどの、語をどういう風に設定するかという理屈からいうと、「青かった」の中の「青い」という意味を持っている部分と「とても」が関係して、その後のラ変みたいなところは、その「とても」みたいなところの修飾を受けることができないはずだ、というわけです。そうすると、「空がとても青かった」という表現と「空が青い」を考えてみると、「空が青いの現在形」の形がどうして述べ立ての文として成立しているかというわけです。そうすると、ここに……動詞と書いてしまうと紛らわしいのですが、動作性の概念が必ず必要になるはずなんです。その動作性の概念というのは、時間的な流れの中で、何かが起こったり変化したり、終わったり、とそういう概念ですから、そういう概念は過去だとか現在だとか未来だとか、という時制と直接関係することが理屈の上からできるわけです。お分かりいただけるかな？

「机た」がないのは、「机」の中に、時間的な流れの中でどうにかなるというような概念が全くないから、「机た」はありえないからないのです。逆にいうと、「た」と直接結びつくような表現は、時間的な流れの中でどうにかなるというような概念を必ず含んでいるわけです。そういう概念が述語として必ず要求される、ヒトの述べ立ての文では。

私は文というのに四種類のものがあると思っていますが、その内の述べ立ての文では、必ず動作性の概念がなければいけない。動作性の概念があれば、通常、動作ですから動作主として主語が必ずありますよね。全ての動作には、動作主があるはず、理論的にですよ。実際の言語としてそれを表す言葉がないとか、そういうことはいくらもありますが、でも理論的には全ての動作には動作主があるはずだ。

そうすると、述べ立ての文には必ず主語と述語があるはずだ、といっていいでしょう。そうすると、「空が青い」の場合にも、主語と述語がないとまずいわけです。「日本語では形容詞だけで述語になるんだ」、というのは、（日本語だけの）特別ルールを持ってこないといけませんね。でもそれはスマートじゃないでしょう。

文法論って結局のところ、なんか美しいと感ずるかどうかみ

たいなところに寄り掛かってしまうところがあるのですが、いくら説明のためとはいえ、「別の言語では形容詞文というのはないのに、日本語ではいいんだよ」、なんていうことを特別ルール、なんかローカルルールを作るのは、どう考えても美しくないというわけで……他の言語と同じように考えられないだろうか。過去とか未来にすると、「あり」が現われてくるということであれば、「空が青い」の後にも本来「あり」かどうかは分かりませんけれども、そういうものに該当する動作性の概念が必ずあるのだろう。で、その動作性の概念が必ずあるならば、しかも或る形式の場合に必ずあるということであれば、コミュニケーションの上では、それは省略可能ですよね。或る場合には必ず存在するのであれば、或る場合であるという状態にしておけば、省略可能ということです。ということは、「空が青い」の後に本来あるべき動作を省略したのだろう。で、これはあくまでも省略ですから、本来ここには空きスロットがあって、そこには動詞が入るはずである。そのように考えれば、日本語の形容詞文の場合でも、動詞を表現しないだけの表現である。で、英語に限らずといっていいかな、他のどの言語の場合であっても、おそらく述べ立ての場合には動作性の概念を必ず必要としていて……で、そういう大きなルールに牴触しない形で説明ができますよねというわけです。

そうすると、例えば形容詞の、この場合でいえば補助活用に属するものは、あれは形容詞と一体のものではなくて、形容詞とは分けて、動詞の部類に入る何かとして、扱わなければなりませんよね、といったらいいでしょうか。

そういう、はじめにAとBとCのBに当たるものがどういう性質を持っているかということを、実際に適応してみるとこの「空が青い」なんていうような表現で日本語で成り立っているけれども、それは文の構造自体としては、動作性のものが後ろに省略されているだけ、というふうに考えることができるだろう。

そういうことを考えてみると、例えば、これは形容詞の補助活用を問題にして扱ったわけですが、形容詞の補助活用以外にも例えば断定の助動詞も、もろにこれに引掛かってきます。「これは机だ」という時にどこにも動詞がないではないか、といいうのが普通の文法論の考え方ですが、でも「これは机だった」という表現が可能なわけですよね。ということは、何処かに動作性がなければ過去形になんかなりえないわけで……そうすると、「だ」というのは単に断定の助動詞だっていって済ませるわけにはとてもいかない。じゃあ、その「だ」をどこでぶった切るかという、そういう技術的な細かいところはともかくとして、断定の助動詞の「だ」なんていわれているものも、どこかにその動作性の部分というのを認めなければならない、ということになります。で、そのようにして、語というものをうまいこと抽出できないか……。

語というのが、どういう単位であるかという時に、はじめにABCなんて書いて、Bの部分が語であるためには、それがいつでもまとまって他と関係しなければいけない、ということをいいましたが、そうすると、「これは机だ」という時の「だ」は動作性がどこかにあるというわけです。私がその動作性とい

う時には、国語学の分野では作用性と形状性なんていうような言い方をしますが、まとめて動作性というふうにいわせておいて下さい。時間的な流れの中でどうにかなるというような概念を含むものを、持っているはずだというわけです。というふうにして、語というものをもう一遍分析し直して、何が語で、何が語ではないか、ということをはっきりさせてくださいよね、はっきりさせましょうよね、というようなことを考えたのが形容詞の文でありました。

形容詞の補助活用を材料にして、なにが語であるかをやったわけですが、それも一番小さな他と関わるような意味的な単位というようなものが何かあるんじゃないかといわけですね。そういうものを語というふうに定義すれば、文の構造はそれを使って説明できるはずだということです。要するに文の構造を説明したい、文の意味的な構造を説明するのが文法論だろうと私は思っています。その意味的なつながりができて、全体としてどういうまとまった意味になるのかという、それが説明できないような文法論は嬉しくない……。ですから、例えば橋本文法などはまったく嬉しくありません。嬉しいか嬉しくないかで、文法論をやっているわけではないのだけれども、何を明らかにしたいかというと、文の構造を明らかにして、全体としてなぜそういう意味になってくるかということが説明できるような文法論を作りたい、そのための単位としては、今申し上げたような単位を設定すべきだろうというわけです。

で、ついでに申し上げておくと私は、時枝さんの詞辞論は非常に優れた考え方だと今でも思っています。時枝さんの詞辞論でいうと、先程の、「空が青い」の後ろにあるはずのスロットに入っている動作性の概念というのは詞になります。動作概念ですから、詞と辞のどちらかというとこれは詞の方に入ります。で、詞というのは、話の素材に関わる表現ですから、そんなものいつでも省略しちゃっていいのか、という疑問もでてくると思うのですが、でもいつでもあるものですから表現しない、というルールを選んでしまえば、それで済むわけですよね。あるのだから表現しろという方にスイッチが入るか、あってもいわなくても分かる場合はいわないという方にスイッチが入いるか、というそれだけの問題であって、その前の段階のヒトの頭の中では話の素材概念に当たるわけなのだけれども、それが表現されないというわけです。時枝さんはゼロ記号の辞というのがあるよということをおっしゃるわけですが、ゼロ記号の詞というのもあるんだろうというわけです。で、ゼロ記号の詞という、しかも或る場合には必ず省略されてしまうというような、そういうものがどうもあるらしいというわけです。で、詞が省略されても話の内容そのものはコミュニケーションとしては増減なく伝わる、というようなそういうシステムであるという場合には省略可能ということです。この、形容詞を材料にして語というものをどういうふうに抽出したらいいか、ということをやってみたというのが形容詞の補助活用の問題でした。

いわゆる接続詞について

更に、もうちょっと大きな単位として文と文とをつなぐ接続詞の問題を取り扱ったことがあります。それは、「犬は走るし

かし猫は寝る」なんていうような、表現があった場合に、一体どこが文なんだろうというわけです……。これも結局、また後でそうではないというようなことをいわなくちゃならないのだけれども、でも、例えば文章というものがあって、その文章という単位から文という単位を抽出しよう、という時に、その文章を構成することのできる最小の単位が文ですよね。先程は文がある場合に、文から語を抽出する時に、語というのは文を直接構成することのできる最小の単位である、で、直接構成できる最小の単位だから、その文の構造を明らかにするときに役に立つはずだというわけです。同様に文章を構成する最も小さい単位を文というならば、文が文章を構成していく様子が明らかにできるような単位とすれば、それはやっぱり文章を直接構成することのできる最小の単位ということになります。こういうものがあると、全体をとりあえず文章だ、というふうに通常定義します。ある場面などで話されたコトバの全体だとか、書かれたものの全体だとかいうような、そういう言い方をします。「犬は走るしかし猫は寝る」という時に、これは一体どういう意味的なつながりを持っているんだろう。そうすると、これはもうどう考えても、「犬は走る」という事柄をAとしましょう、「猫は寝る」という事柄をBとしましょう、そうすると、AとBの二つの叙述がありますが、二つの叙述の間にどういう関係があるかということについての、話し手の判断がここ（「しかし」）に表れているんですよね。で、通常「しかし猫は寝る」というそこまでで一つのまとまりで、これが文だといわれています。したがって、一行目で一つの文、そして「しかし」以降で二つ目の文で、二つの文からできてるよというのが普通の説明と思いますが、この全体を一つの文章と見たときに、この文章は一体どれだけの要素に分けることができるだろうか……。そうすると「しかし」というのはどう考えてもAにもBにも属していませんよね。ここではじめて変なことを聞くという顔をしてる人がいっぱいいるけれども……。「犬は走る」という叙述内容と「猫は寝る」という叙述内容との間にどんな関係があるかということを話し手がどう捉えているかということに関わる判断が「しかし」です。したがって、その「しかし」というのは「猫は寝る」に属しているわけでは決してありません。もちろん「犬は走る」の方に属しているわけでもありません。そうすると、少なくともこの「犬は走るしかし猫は寝る」というのは、これが文章だとすれば、最低三つの単位からできていますね。で、最低三つの単位でできているとすると、その文章を構成することのできる最小の単位を文というからには、この場合の「しかし」は文でなければならないということになります。定義するということはそのくらい重いといったらいいのでしょうか……。どんなに常識とか自分の考え方だとかに反していようと、定義したからには、定義には従わなければならない。よく辞書に書いてある説明を定義だ、とかいって持ってくるレポートが結構ありましたが、定義というものはそういうものではなく、定義したからには、その定義に合うものがその定義のものであって、それ以外はどんなにそこに入れたくたって、入れちゃいけない……そういう種類のものです。

で、文というのを、文章を直接構成することのできる最小の

単位という風に定義するならば、「しかし」も当然一つとして数えるべきだというわけです。そういうことは、例えば「机の上」なんていうときは、これは私たちは通常三語という風に考えているわけで、これが三語ならばこっちは三文と考えていいはずですよねというわけです。

文や文章を成立させるもの

三文とはいったのだけれども、ここから後はまたちょっとやこしい話になるかもしれないのですが、時枝さんの考え方によれば、「机の上」だけでは、まとまった表現にならないですよね。「机」と「上」と「の」の関係というのは「机」と「上」という二つの概念の間に話し手が「の」で表されるような関係があるよと考えて、「の」を選んでそこに表現したわけですよね。そうすると、じゃあ、「机の上」というまとまったイメージはできるけれども、それで述べ立てになっているかというと、いろんなものが不足していて述べ立てにまではなっていません。「机」と「上」とを結び付けてもっと大きなイメージを一つ作りはしましたが、話し手の述べ立てとして何かを表現しているかというと、それには足らないわけです。「机の上だ」とかもっと必要なものがある。で、それが表現がされていないというわけです。そうすると、じゃあ「犬は走る。しかし猫は寝る。」という時に、これはそれだけで表現として成り立っているかというと、「机の上」と同じですよね。机の上と同じだというのは、全体をまとめて述べ立てる働きが一体どこにあるんだろうというわけです。Aの文とBの文の間に「しかし」があって、「しかし」でAの文とBの文の関係はつけられているけれども、その関係をつけて一体なーに、といったらいいかしら。一体なーに、といっても分かんないかな。どう表現したらいいでしょうね。「机の上」だけでは表現が表現として、述べ立ての表現として成り立たないのは、この全体をまとめる辞がないからですよね。「机」と「上」を単に結びつけただけで、なんか新しい素材を作り上げただけ、といったらいいでしょうか。で、文についても、そういうことがいえるんじゃないかというわけです。

で、あの、先ほど来、時枝さんの詞辞論を私はかなり熱烈に支持している方だと思うのですが、個人的には。でも、時枝さんの詞辞論が全くそのままでいいかというと、やっぱりそうではなくて、述べ立ての辞と関係概念の辞というのは、はっきり分けるべきだろうという風に思っています。そうでないと、述べ立てとしてきちんと成立するということの説明がつかないといったらいいかな。「机の上」っていう時の、ここ（「の」）に辞があるから詞辞論でいいじゃないかじゃなくて、表現として成立するためには、その表現全体を話し手がどういう態度で判断して叙述しているかという、そこの部分がないといけないといったらいいかな。だから肯定判断でもいいし、推量判断でもいいし、なんかそういう判断が表現全体にくっつかないとまとまった表現にはならないといったらいいでしょうか。

そうすると、「犬は走るしかし猫は寝る」っていうこの表現がこれで全体として、もし文章であるならば、「犬は走るしかし猫は寝る」のこのもっと後ろに、この全体に対する話し手の叙述判断があるはずですよねというわけです。で、叙述判断が

あるはずですよねということにすると、その叙述判断というのも文章を直接構成している最小の単位ですよね。今の場合でいえばゼロ記号になりますが、話し手が何かを表現するときに、どういったらいいんでしょうね、肯定的にいうだとか、否定的にいうだとか、そういう判断、全体に対してくっついているようなそういう判断です。この場合だから、ちょっと、肯定とか否定とかいうと具合が悪いかもしれないですが、話し手の判断に関わる表現がどこかにないといけないというわけです。で、これは、この全体が文章であるとするならば、これも文章を直接構成している要素になりますよね。そうすると、ゼロ記号の文があるということになります。なんか常識的な文法論からはかなり外れた結論になりますが、表現されないけれども文だというような、そういう単位を設定しないと、文章を構造解析していくことができないでしょうというわけです。

で、ここにあるものは、じゃあ、実際に表現されるというような場合はあるのだろうか、ないのだろうか、というわけです。いつでもゼロ記号なのだろうかというわけです。探してみたのですけど、なかなか無くて。例えば、ということで、こんな例。「腹が減ったので飯を食ったよ」というような表現があったとしましょう。これは、先ほど来の私の理屈からいえば、どんな風な単位になるかというと、「腹が減った」というこれが一つの文です。で、「ので」も一つの文です。それから「飯を食ったよ」も一つの文ですよね。なぜそうなるかというと、全体の意味のつながりが、「私は腹が減った」という述べ立ての内容が一つあります。それは話し手が明らかにもう述べ立てとして肯定的に自分が「腹が減った」ということを叙述しています、といったらいいかな。その叙述と、もう一つ「飯を食ったよ」という叙述をして、その叙述同士の間に「ので」で表される関係があるぞという風に捉えているわけです。そうすると、「腹が減ったので飯を食ったよ」というのは、少なくとも三つの文で、三つの文のその一番最後にもう一つなにか要素があって、四つの文からできているはずだというわけです。で、四つの文からできているはずだという時に、四つめの文に該当する場合があるのだろうかないのだろうかというのが、こういう表現です。おそらく「飯を食ったよ」で一つの叙述であるという場合がもちろんあると思うのですが、でも「腹が減ったので飯を食った」という全体に対して「よ」がくっつくというような、そういう意味的な構造の場合もあるんじゃなかろうかというわけです。なんか、あるんじゃなかろうかなんていう言い方でいいかな。

初めてこんな話を聞くと、なかなか納得しないでしょう。こういう話をいきなり学生さんにすると、分かってくれないし混乱するだろうなって、あんまり話さなかったんです。ここ三年くらいかな、二、三年、あの……、話さないでいると私が死んじゃったら誰も聞いておいてくれないっていう、そういう思いもあって、ちょっと泡食って学生さんにも話すようになりましたが、その以前はというと、もうなるべく話さないでおこうというつもりで、自分一人で考えてました、といったらいいかな。

で、この場合に、「腹が減ったので飯を食ったよ」という時の、

「AのでB」と、これに対して話し手の全体に対する判断といったらいいのでしょうか、それが付け加わるような、そういう構造というのが必ずあるだろうというわけです。で、必ずあるだろうというのは、「よ」がそういう単位であるにしろないにしろ、そこには必ず話し手の全体をまとめる判断がなければ表現として成り立たないはずだというわけです。表現として成り立たないはずならば、そこには必ずあると考えないわけにはいきませんよねというわけです。ということで、それが実際に形式を伴って出てくる場合ってあるかなぁというので、なんか怪しいのがこんなものなんです。おそらく多くの場合は、表現されないのだろうと思います。表現されなくても、話し手が何か述べ立ての判断をして、まとまった概念として述べ立てたものは、それはもう一度素材として話の中に繰り入れることができる。だからこういう形の文章ができているわけですよね。それができなければ、「腹が減った」という明らかに叙述の判断のある内容と「飯を食った」という判断が、「ので」で結ばれることがあり得ないから、ないはずです。ところが、こういう風に使われるということは、いっぺん述べ立てられたものは、新たに素材としてもう一度使い回しできるということですよね。そうすると、人の頭の中で文章をどういう風に作るか、表現としてどのようにするかというときに、こういう形で文章がいろんな文から作られて行く、その構造はこんな風になっているという風に考えた方が、文章の構造を理解するときによほど役に立つのではないか。それは、こういう風に考えないと納得いかないですよねということなんです。文法をやる人は自分の論とちょっとでも違うと、大違いになっちゃう。どう言ったらいいんでしょう……。数学の証明に不備があるみたいな感じで、もう自分とちょっとでも違うと全然価値がないように思う、とでも言ったらいいかな……。文法論をやる人は、多かれ少なかれそういう唯我独尊でないとやっていられないと言ったらいいかしら。そういうところがあるので、そういう風に割り引いて聞いていただいていいのですけれども、こういう風に考えて行った方が、少なくとも従来の説に比べれば、文章理解に近いでしょうと言ったらいいんでしょうか……。で、ことはついでに、「腹が減ったので飯を食ったよ」を例に、たとえば変形生成文法ではこんなものはどういう風に扱うのかなあということを、私は相当疑問に思っています。SプラスV、変形生成文法だと、NPプラスVPで、主語と動詞っていうようなものですが、これを変形してどんな文でも生み出すことができるんだって言うのですが、こんなものを生み出してしまうということは変形生成文法ではできないはずだと言ったらいいんでしょうか。変形生成文法が生み出せるのは、「腹が減った」だとか、「飯を食ったよ」だとか、まあ、「よ」まで行く場合もありますが、そういう部分については、変形生成文法で生み出すことができるはずですが、でもこれは、一文ではないわけです。変形生成文法は、文とはこれこれということで、こういうものから変形して生成できるものだということで変形していくわけですが、どうやったって、これは二文なわけですから……。二文というのは、「腹が減った」、これをAとすれば、Aと、「飯を食った」というBの文が、それぞれ生成できるという、それは理解できますが、

その二つの文と、さらにその間に「ので」があるというようなことを、もし、これから説明できちゃったら、それは理論がおかしいでしょう。もしそれができちゃったら、もうなんでもありですよね。もっと分かりやすくいえないかな。例えば、「しかし猫は寝た」にしようか。「しかし、猫は寝た」というだけの表現を変形生成文法で生み出せっていったら、おそらく、これを生みだすことはできないだろうと思います。というか、できちゃったらおかしいといったらいいでしょうか。だって、変形生成文法でいえるのは、「猫は寝た」の方は生み出せるはずでしょうというわけ。でも「しかし」というのは、「猫は寝た」の外にあって、なんかもっと別の表現との間の関わりを述べ立てているはずのものですから。

「しかし、猫は寝た」というのは通常これを一文という風にいっているわけですが、通常一文といっているものを生み出せるよといっているものを、もし変形してできたとしてもそれは変でしょ。変というかおかしいというか。そんなものが説明できちゃったらできちゃう方がおかしい。そんな言い方でいいかな。変形生成文法論者はいますか。手を挙げにくいかもしれませんが。何でも文であれば生成できるよっていうけれども、でもおそらく「腹が減ったので、飯を食ったよ」まあ、「よ」が無くても良いですけど「腹が減ったので飯を食った」でも「しかし、猫は寝た」だとかそういう表現も生み出せないはずだし、生みだしてしまったら変だし、そんなものを生み出してはいけないといったらいいかな。生みだしてはいけないはずだと私が思っている理由はおわかり頂けますよね。二つ以上の文を生み出すことになっちゃうからです。生成文法は原則として一つの文を変形して一つの文を作るというか生みだすわけです。一つの文をどうにかしても二つの文を作れませんといったら良い。その何というか、バナッハ＝タルスキーの定理なんかご存じかな。球をうまいこと切り分けると同じ球が二つできるとかっていう定理がありますよね。言語ではどうもそういうことはないらしいよというわけです。文章を分析していくという時に、その文章を直接構成する単位というのはどんなものかというと、どうもこういうものであるらしいというわけです。

文法論と文章論の枠組みの崩壊

さて、ここまできてみんなぶっ壊すようなことになるのだけど、文法論ってあることに気がついちゃうと前にいったことが全部オシャカになるのです。そういうことが、ずっと続いてあれやこれやでここまではもうこの先自分の中で変わらないだろうなぁと思うような所だけ論文にしたりするのだけども、でも変わっちゃったりするのです。

「でも変わっちゃったりする所」というのは、実は、指示語に関わる部分なのです。指示語に関わる部分で先ほど来、語というのは文を直接構成することのできる最小の単位と定義し、文というのは文章を直接構成することのできる最小の単位ととりあえず考えているわけです。とりあえず考えたのだけども、そのとりあえず考えたものは正しいのかというわけです。どうも今までそのことを問うた人はいなかったように感じています。

要するに理論的に一番小さい単位を決めたのだから、それによって文とか文章だとかというのは成り立っているはずだという、そういう先入観から文章だとか文だとかの意味的な構造を考えていたといったらいいでしょう。それは例えば「最も小さいと思われるものが寄り集まって全体ができるよ」というそういう構成観ですよね。言語の構造はそのようになっているという風に通常考えていたので、みなさんそういう風に考えていたというか。誰もはっきり確かめていなかったということです。

実際にそうなっているのかという時にえらく困るのが、指示語の関係なのです。これは例えば、「青木が私と文法論という題で話した」という表現がまずあったとしましょう。「これを聞いた」といった時に、こちら（「青木が私と文法論という題で話した」）がAでこちら（「これを聞いた」）がBだとしようか、そうすると今までの文章論は文というのが文章を直接構成する最小の単位ですから、結局全て樹形図に描けるというわけです。全て樹形図に描けて樹形図のその枝別れのその枝の一番先端に文が一個ずつぶらさがるというような、そういう文章構造を考えていました。そうでないような文章論を見たことがないわけです。実際そうかというわけです。そうすると「これを聞いた」という時の「これ」には、「青木の話」が入るのであって、AとBとの間に直接の意味的な関係を認定することが非常に難しい。あるいは「この話はつまらない」とかいう時の「この」の「こ」は一体何を意味するか。「この話はつまらない」の「この」は単なる指示ですよね。単なる指示の近称で何の内容も持ってなくても良い。でも「これを聞いた」という時には「これ」に「青木の話」がそこに代入されるのであってBの表現はAの表現とどういう関係にあるかというと、Aの表現の部分が「これ」に代入されるのであって、AとBとが直接枝別れの樹形図のどこかにぶらさがってノードで繋がるようなそういう関係ではどうもないでしょうといったら良いでしょうか。

そういう風に考えていくと、従来、文章論が樹形図を文章構造の要に据えてきたというのはどうも成り立たないのではないか。どうも成り立たないのではないかということをいい始めてしまうと、今まで私がお話してきたような、文章を直接構成する最小の単位が文であるだとか、あるいは語の方も怪しくなってくるわけです。怪しくなるのはわかりますよね。従来一つ一つの文が樹形図の枝別れの先にぶらさがるような形の構造を考えていました。でも、そうじゃない例がいっぱいどうもありそうだ。しかも、そうじゃないという時に指示語がどうもそれに深く関わってきて、指示語の場合にはどう名前をつけていいのかわからないのだけれども、前のある事の事柄の内容が指示語に代入されるといったら良いかな。そういう関係があって、樹形図で説明不可能な例がどうもあるのではないか。そうするとまたこれで、文とはどういう単位であるかという所から実は覆ってしまって、目下の所私の頭の中ではしっちゃかめっちゃかというか、大体いつでもしっちゃかめっちゃかなのです。文法論をやっていると。「これは良いよね」とか、「ああ、良いものに目がいった」と自分で思うことが時々あるのだけれども、またその後で変なものにぶちあたるわけです。それで、ぶちあたるとまた全体が崩れるわけです。部分が崩れるということは

まず有りません、全体が崩れます。なんかもうやっていて、空しいのかどうなのか、やっている間に、より真実に近づいているんだろうなぁとは感じていますので、それはそれで良いのだけれども、でも論理というのはややこしいなぁといったら良いのか。本当に一か所傷があったら我慢ならないといったら良いか、そういう分野です。どちらかというと数学に近いのだろうかという風な感じを持っております。ということで、（時計を見て司会に）五時半には終われですね……ということで目下の所はそんなことを考えております。頭の中はしっちゃかめっちゃかで、おそらくあなた方の頭の中もしっちゃかめっちゃかになったはずです。ちゃんと理解していただけたら大体しっちゃかめっちゃかになったはずです。今日はとんでもない天気の中をわざわざ聞きに来てくださってありがとうございました。これで終わりです。本当にありがとうございました。

（「言語とヒト」「脳と言語を操る機能群」「言語教育のあり方」などについては、時間切れで触れることができませんでした。）